

新島襄海外渡航150周年記念

「新島の足跡を辿る」碑前祭ツアー

今年6月14日は、新島襄が函館から国禁を犯して脱国した1864年6月14日からちょうど150年後にあたります。同志社にとって感慨深いこの記念の日にあわせ、6月14日から15日の二日間にあわせて「新島の足跡を辿る」碑前祭ツアーを企画したところ、全国から多くの校友・同窓の参加がありました。

函館と風間浦、二つの記念碑をそれぞれ守り続けてこられた地元市民の方々、新島との縁をきっかけに交流を深めてきた地元自治体の方々にも多数ご協力ご協力、ご出席をいただき、あたたかい交流がますます深く、深く、続けられています。ことを感じました。21歳の青年、新島がこの地に蒔いた種が大きな実りとなり、150年後の今も、また新しい出会いを紡いでくれることに深く感じ入る二日間となりました。

「その時」の心情を思う

〜新島襄海外渡航の地 碑前祭

激しく降っていた雨が、人が集まるにつれ徐々に小さくなっていききました。6月14日土曜日午後1時半に始まった函館での碑前祭。21歳の新島がまさにここから旅立った「新島襄海外渡航乗船之処」碑の前に130人も人が集いました。スピーカーから流れるオルガンの前奏が、和やかな中にも厳かな雰囲気です。

6月14日には毎年ここで碑前祭が行わ

れています。150年という特別な年を迎えた今年には、碑前祭を含む二日間のツアーが企画され、日本全国から多くの校友・同窓が参加して、水谷誠理事長、大谷實総長、村田晃嗣大学長をはじめとする同志社関係者や函館市民とともに、その日の新島の心情に思いをはせました。

開式の頃にはすっかり雨もやみ、水谷理事長による聖書朗読と祈禱の後、大谷総長から「この碑は新島の不動の『志』の原点。同志社の今を託された一人として、それを継承・進化させるために努力

する決意である」との式辞が、また函館市の片岡格副市長からは「函館と同志社の交流がますます深まっていくことを願っている」との挨拶がありました。

全員でカレッジソングを歌い、水谷理事長による祝詞の後、献花が行われ、日ごろ碑を見守っていたらいてる函館市民への感謝の言葉で碑前祭は締めくくられました。

同志社の歴史と未来を考える  
〜記念講演会

次のプログラムである記念講演会の会場は、見晴らしの良い高台にあるFMいるかホール「ペルラ」。港から貸切バスに乗る人、雨上がりの坂道を歩いて登る人、さまざまでしたが、函館名物の坂を徒歩で登った人は、校友会函館クラブの皆様興味深い解説つきで、司祭ニコライの日本語教師として新島が敷地内に住み込んでいたハリストス正教会の外観などを見学することもできました。

記念講演会では、大谷総長の挨拶の後、同志社社史資料センター小枝弘和社史資料調査員による「新島襄にとっての函館」、村田晃嗣大学長による「新島の志と同志社の今後」の講演がありました。用意された150席をほぼ埋めつくした参加者は、社史資料センターの資料を用いた臨場感ある内容の小枝氏と、巧みな話術で聴衆をひきつける村田大学長の話に聴き入っていました。

講演の内容は13頁から23頁でご紹介します。

函館山山頂での楽しいひととき  
〜交流レセプション

交流レセプションの会場は、函館山展望台3階の山頂レストラン「レガート」開会の挨拶で大谷総長も「よくぞこれだけお集まりいただいた」と感嘆したほど、当初の予想を上回る数の参加者で大盛況となりました。

まずは、新島が函館から上海まで乗船したベルリン号の模型が、渡航150周年記念品として同志社から函館市へ贈呈されました。村田大学長による乾杯の後





の道をバスで約20分。海のすぐそばまで山が迫る、険しい地形が続きます。バスを降りた時は降っていた雨が、碑前祭が始まるタイミングに上がり、甲高い海鳥の声と山の鳥の声が天高く響き合う、この地ならではの雰囲気にも包まれての碑前祭となりました。

木村良己同志社中学校・高等学校長に

は、賑やかな歓談。旧交をあたためたり、恩師に挨拶をしたり、名刺を交換したり、思い思いに過ごしました。同志社関係者、函館市と風間浦市からの来賓も話の輪に加わり、記念写真にも応じていました。校友会や同窓会による支部単位での参加が目立つ中、個人での参加もありました。ホームページを見て締め切り直前に申し込んだという岡山の中元康仁さん（1997年文学研究科修了）は、京都を離れて以来、このようなイベントに参加するのは初めてだという。「今の私があるのは同志社のおかげ。碑前で新島襄の志に思いをさせ、同志社創立に対する感謝の気持ちを伝えることができたのが一番の喜びでした」。

開宴の頃から不安定だった天候がすつきり落ち着いた夕暮れ時、大きなガラス張りの窓から外を見れば、暮れゆく函館の町の美しい景色が目飛び込んできました。雨上がりの空には虹もかかり、まるで今日の日を祝福してくれているかのようでした。

カレッジソング、同志社チアード盛り上がった後、加賀裕郎女子大学長の挨拶で、楽しい宴はお開きとなりました。すっかり暗くなった屋外に出ると、函館の



よる聖書朗読と祈祷、風間浦村民歌演奏の後、飯田浩一風間浦村長より「良心教育・全人教育を実践している同志社との交流が未来永劫なことを祈念する」との挨拶があり、大谷総長も「下北半島に同志社精神の普及を祈る」と応えました。佐藤光彦校友会青森県支部長の挨拶の後、海峽の村にカレッジソングの歌声が響きました。

交流の深さを感じさせる中学校で  
～午餐会

碑前祭の後、風間浦中学校体育館で、午餐会が行われました。体育館の壁には、初めて同志社と交流した21年前の中学生による「新島襄と同志社」のレリーフが常に掲げられていて、両者の深い交流を物語っています。

大谷総長の挨拶の後、村田大学長から飯田村長へ、150周年を記念して製作されたベルリン号模型が贈呈されました。また、同志社と風間浦村交流の礎を築いた功績に対し4名の方へ、飯田村長より感謝状が贈られました。昼食を兼ねた歓談の後、中村友一校友会副会長、玉村三保子同窓会会長の挨拶に続き、函館と大

素晴らしい夜景が待っていました。

海峽の村にカレッジソングが響く  
～寄港の地 碑前祭

二日目のメインイベントは、風間浦村での碑前祭です。風間浦村は、江戸で新島七五三太を乗せた快風丸が、函館を目前に悪天候のため停泊した下風呂港のある人口2000人あまりの小さな村です。漁業のほか温泉でも知られ、新島もその湯で心身を癒しました。

この史実から、1992年、下風呂漁港の海峽いさり火公園に建てられたのが「新島襄寄港記念碑」です。以後、同志社と村の交流はより活発になりました。今年で22年目となる留学生の小・中学校訪問に始まり、村唯一の中学校、風間浦中学校と同志社中学校との交流も双方に大きな成果をもたらしています。

函館から下北半島の先端、大間へは、フェリーで90分の船旅です。大間港に着くと、岸壁に色鮮やかな大漁旗が見えました。強い雨風の中、一生懸命旗を振っているのはボランティアの高校生。思いがけない出迎えに心が熱くなりました。大間港から風間浦村までは、海岸沿い

間を結ぶフェリー会社社長でもある佐藤校友会青森県支部長の挨拶もありました。さらに、木村同志社中学校・高等学校長から「出会いとは不思議なもの。快風丸が順風満帆であったなら今日の日はなかった」との話と、参加者の一人である若い校友の紹介がありました。

紹介されたのは、同志社中高出身で、北海道大学大学院水産科学院博士課程2年生の平田和彦さん（2005年同志社高等学校卒）。当時の高等学校の校舎にあったツバメの巣から鳥に興味を持ち、海鳥の研究を志して北海道大学水産学部へ進学。2012年春、津軽海峡に生息する海鳥の生態調査を行うため、下北半島の大間町に「大間海鳥研究室」を開設した若き研究者です。

中学校時代の風間浦中学校との交流経験から、研究所の看板を作るにあたって、思い入れのある風間浦のヒバ材を使用したという平田さんは、今年5月から拠点を風間浦村に移し、風間浦村民として生活しながら調査を行っています。

夜間の漁港でも調査するので、最初は何度も怪しまれることもあったといいますが、今では、地元の高校生たちから「カモメの人」と言われるほど地域にとけ込み、



親しまれる存在。調査内容を新聞にして地域で掲示、配布したり、チャンスがあれば学校でも講演しています。「このあたりは世界有数のウミネコの生殖地。僕の研究を知ってもらえば、自分たちの地域がすごい場所だと誇りを持つてもらうこともできると思うんです」。

「同志社では、個人の可能性を引き出す教育を受けられたと感じます」という平田さんは、午餐会の後、大間港まで来て、見えなくなるまで手を振ってフェリーを見送ってくれました。

### 膝つきあわせての歓談 〜船上レセプション

津軽海峡を渡って函館に戻る航路は、まさに150年前、新島がたどったルートです。改めて往時をしのびつつ、船上レセプションが行われました。総長、学長、学校長以下、全員が膝つきあわせ、北北の美味しい海の幸とお酒をお供に、リラックスした雰囲気です。花が咲きました。楽しい時間のうちにフェリーは函館に到着、「新島の足跡を辿る」碑前祭ツアーの全行程は無事終了となりました。

150年前の、新島のやむにやまれぬ

行動が同志社を作り、多くの人を育てることにつながった。折に触れてそのことを感慨深く思い返す二日間でした。一方で、この良き出会いも、楽しいひとときも、元をたどれば若き日の新島がもたらしてくれたもの。そんな感慨を共有し、同志社人としての絆を再確認できた二日間でもあったのではないのでしょうか。

## 講演 新島襄海外渡航150周年記念講演会 新島の志と同志社の今後

同志社大学長  
村田晃嗣 むらた こうじ

### アーモストに今も 新島の肖像画が掲げられる理由

本日は、全国各地から、新島襄渡航150周年記念事業へご参加いただきましたことに、改めてお礼を申し上げます。

私の今日の蝶ネクタイ、これは、新島襄が卒業したアーモスト大学のもので、150年前、新島は函館から出国して、一年あまりの時間をかけてボストンにたどり着き、マサチューセッツ州アンドーバーのフィリップスアカデミーで学ぶ機会を得ました。フィリップスアカデミーは、大変広くて立派な全寮制の学校で、

ジョージ・ブッシュ大統領親子や、映画「カサブランカ」のハンフリー・ボガード、ジャック・レモンなど、非常に多彩な人材を輩出している名門校です。

その後、新島はアーモスト大学に進学します。1821年に創立された、全米屈指のリベラルアーツ大学です。数日前、私はアーモストを訪ねました。これは、私個人にとっても非常に嬉しいことでした。1985年、私は同志社大学の学生としてアーモストサマープログラムに参加しました。さまざまな学部の学生が、アーモスト大学の寮でひと夏を過ごし、英語とアメリカ文化について学ぶ

というプログラムです。その後1987年に再訪して以来、27年ぶりに、懐かしいアーモストを訪れることができたのです。

京田辺キャンパスの5倍もある広大なキャンパスの中心にジョンソン・チャペルがあり、その内部に、歴代学長や著名な卒業生の肖像がずらりと掲げられています。新島襄の肖像が、チャペル正面の右という大変良い場所にあることをご存知の方も多いでしょう。正面左側は、卒業生でただ一人アメリカ大統領となったカルビン・クレーリッジの肖像でした。

しかし今回、驚くべきことに、肖像画

の位置がシャツフルされ、クーリッジ元大統領の肖像画は正面左側からはずされていきました。しかし、新島の肖像は、変わらず元の位置にあつたのです。

このことについてアーモスト大学のマーティン学長先生にお話を聞きしました。どのような基準で肖像画を配置しているか、それは、著名であることや、資産家であることなどではなく、「アーモスト大学というコミュニティに、知的・精神的にどれだけインパクトを与えたか」であるということです。そして、最も大きなインパクトを与えた卒業生が新島裏であつた。だからただ一人、肖像画の位置を変えなかつたのだと。私は大変感動しました。わずか二日間の滞在でしたが、アーモストに行つて良かったと思える出来事でした。

**日本の大学を取り巻く環境が大きく変わっている**

さて、新島が出国した150年前から50年後、つまり今から100年前を振り返りますと、新島はすでに他界し、同志

社は大学になっていました。さらに50年後の1964年、東京オリンピックの年は、大学進学率がわずかに10パーセント強でした。その25年後、今から25年前の1989年は、18歳人口が200万人を超えていました。

そして今、新島がこの地から渡航して150年の時がたちました。日本はすでに世界第2位の経済大国ではありません。そして急速な少子化に直面しています。200万人以上あつた18歳人口は、今では110万人にまで減少しました。これは2018年以降さらに急速に減少して2030年には106万人、最終的には80数万人になると予測されています。

現在、日本の大学進学率は約51パーセントです。今後さらに伸びるとしても、せいせい55パーセントくらいで頭打ちではないかと予測されています。つまり、大学の受験者数は明らかに減っていきま

す。大学は、非常に厳しい競争の中におかれているのです。

社会における大学のあり方も変わっています。18歳人口の15パーセント以下しか大学に進学しない社会では、大学生は

アメリカで、戦後、急速に大学進学率が伸びたときは、州レベルで「コミュニティカレッジ」と呼ばれる短大のようなものを大量に作り、トップ大学のレベルを下げることなく、裾野を広げることに成功しました。ヨーロッパについては、EU加盟国の大学の85パーセントが国立です。国が高等教育の質をまかなっているのです。

日本はどうでしょう。大学進学率の上昇に対し、政府は国立大学の数をあまり増やさずに、私立大学の増設をほとんど認めた。そして少子化が進むと、つぶれるところはつぶれてくださいという姿勢になつた。私立大学を、教育政策の安全弁として利用したのです。その問題が、今、深刻に表れているのだらうと思います。

**アイデンティティを自覚しながら国際的な競争に挑む**

少子化が進む一方で、グローバル化というものも急速に進んでいます。大学においても、これまでは日本国内で序列化されることはありませんが、今や、大学

の世界ランキングが何種類も作られるような状況です。一方では少子化、一方ではグローバル化による熾烈な競争、この両方に、同志社大学をはじめ日本の大学は直面しているのです。

大学世界ランキングの中で最も有名なのは、イギリスのTimes Higher Educationという出版社のものです。このランキングでトップ100に入る日本の大学は2校しかありません。23位の東京大学、52位の京都大学。上位200位では東京工業大学、大阪大学、東北大学、300位なら、首都大学東京、名古屋大学、東京医科歯科大学が入ります。400位まで広げると、筑波大学、北海道大学、九州大学。400位までのランキングに入っている日本の大学はわずか11校です。

このランキングでお気づきになることはありますか？私立大学が入っていない、また、国立大学の中で、たとえば一橋大学が入っていません。それは一橋に理系学部がないからです。ランキングは、『Nature』や『Science』など、世界的な科学雑誌に教授の論文が載ったり、引用されたりすると上がる仕組みです。つまり、基本的にこの種のランキングは理系基準でつくられているのです。

では、なぜ私立が弱いのか、残念ながら自然科学の研究では圧倒的にお金が物をいうからです。OECD加盟国の中で、政府が高等教育に拠出している金額の割合が最低なのが日本です。これではなかなかお金のかかる理系分野で国際的な競争するのは難しいでしょう。

また、アーモスト大学には寄付による基金があり、その金額は1700億円、学生一人当たり1億円にもなります。日本で一番優秀と言われる東京大学が近年設立した基金では、まだ90数億円しか集まっています。私学では慶応義塾が400億円、同志社は190億円。では、ハーバード大学はどうでしょう。なんと3兆円です。MITが1兆7000億円です。

このように圧倒的な経済基盤の差を抜きにして、ランキングだけを問題にしても意味がないと思います。

ランキングに関してもう一つ申し上げますと、世界20位までのうち、1校以外はすべて英語圏の大学です。どんなラン



「エリート」。しかし50パーセントを超える社会では「マス」ということになりません。社会の中で大学の位置づけも、昔とは全く変わっているという点も皆さまにご認識いただきたいと思えます。

キングでも、作る側が有利にできている  
 米が有利になっている。隠されたバイア  
 スが常に潜んでいるのです。  
 我々は、少しでもランクを上げられる



よう努力はいたしますが、ランキングは  
 あくまでも目安であって、そのことが自  
 己目的になつてはいけません。そうなら  
 ないためには、しっかりと競争をしま  
 がら、大学のアイデンティティを常に自  
 覚することが大切だと思います。

**同志社が大切にすべき  
 アイデンティティとは**

では、同志社大学にとって何がアイデ  
 ンティティなのか、私は常々三つのこと  
 を申し上げています。

ひとつは京都に位置するということ。  
 これは大変大きな特徴です。同志社には  
 40年の歴史を誇るAKPという留学生プ  
 ログラムがあります。アームストをはじ  
 めとするリベラルアーツ大学の学生が、  
 1年間同志社大学で学ぶというものです。  
 ハーバードなど、主としてアイビーリー  
 グの超一流の総合大学で日本文化を学ぶ  
 学生のためのKCSJというプログラム  
 もあります。ドイツのチュービンゲン大  
 学のプログラムもあります。世界中の名  
 門大学の学生が同志社大学へ学びに来て

いるのです。それは同志社大学が良い教  
 育をしているからではありませんが、一番  
 の理由は、同志社大学が京都にあるから  
 でしょう。京都の魅力は格段に大きいの  
 です。

二つ目は、新島襄という創立者の、明  
 確な教育理念があるということです。日  
 本の600もの私立大学で、創立者の名  
 前と大学が密接不可分に結びついている  
 のは4校しかありません。福沢諭吉の慶  
 応義塾、大隈重信の早稲田、津田梅子の  
 津田塾、そして同志社です。私たちはそ  
 ういう大学で学び、教えているのです。

三つ目は、キリスト教を教学の中心に  
 据えていること。これら、同志社大学ら  
 しい特徴を生かし、アイデンティティを  
 しっかりと意識しながら、国際的な競争  
 に果敢に挑んでいくことが、今後の課題  
 だと思っております。

**21世紀に通用する  
 グローバルな教育を進めたい**

そのため、我々はさまざまな改革に着  
 手しております。まずは、副専攻として

「グローバル・リベラルアーツ副専攻」  
 を創設したい。全学部の学生が履修でき  
 る、すべて英語で行う教育プログラムは、  
 卒業時に大きな付加価値となるもので  
 す。1学年で500人程度が果敢に挑戦して  
 くれたら成功だと考えています。

その時に考えなければならぬのが、  
 英語は苦手だけれど、論理的な思考がで  
 きる、非常に優秀な学生のことです。彼  
 らは、英語ができないことだけを理由に、  
 向学心をそがれたり、優れた教育を受け  
 る機会を奪われたりしてはいけません。

同志社大学には、世界中の優秀な学生  
 が学んでいます。彼らは日本語で、日本  
 の文化や経済を学びたいと思つている。  
 彼らと、能力や向学心はあるけれど英語  
 が苦手な学生とを一つのパックにして、  
 共に、日本語で、日本の文化や経済を学  
 ぶ、そういうプログラムも設けたいと考  
 えています。そして、今出川と京田辺の  
 両方に国際寮を作りたい。日本人と外国  
 人の学生が衣食住を共にしながら共に学  
 び合える、小規模でアットホームな国際  
 寮を、ぜひ作りたいと考えています。

私がアメリカ研究をする出発点になつ

たアームストサマープログラムは、さま  
 ざまな事情で終了してしまいました。し  
 かし、同志社大学がアームストの町にド  
 ミトリイを持てば、同志社大学の学生た  
 ちが、アームストの町で暮らし、アーム  
 スト大学の授業を聴講し、近隣の大学の  
 授業もつとて、現地の学生と一緒に勉強  
 できる。まさに新島が150年前に経験  
 したことを、同志社大学の最も優秀な学  
 生に提供することができると思います。

グローバル・リベラルアーツ副専攻の  
 試みが「同志社の中にアームストを作る」  
 ものだとすれば、逆にこれは「アームス  
 トの中に同志社を作る」試みです。将来、  
 このようなことができたなら、同志社大  
 学は、ランキングとは関係なく、21世紀  
 に通用する立派なグローバルな教育を進  
 めていけるのではないのでしょうか。

私たちは、これらのことを、現実に一  
 歩一歩進めようとしております。しかし、  
 大きな試みを前にするときには、全学が  
 一致しなければなりません。教員だけで  
 はなく、職員や学生諸君の協力も必要で  
 すし、皆さんをはじめとする校友、同窓  
 の方々のご協力を仰がなければならぬ

局面もあるかと思ひます。

オール同志社で、21世紀にさらに発展  
 していけるような、グローバルな教育を  
 進めていきたいと念願しております。今  
 後もご協力いただけるとありがたく存じ  
 ます。

(2014年6月14日、FMいるかホー  
 ル「ペルラ」での講演を編集し掲載)

# 講演 新島襄海外渡航150周年記念講演会 新島襄にとつての函館

同志社史資料センター  
社史資料調査員

こ  
えだ  
ひろ  
かず  
小枝弘和

ここ函館が、新島襄が脱国した土地であることは皆さんよくご存知だと思います。今日は、同志社史資料センター所蔵の資料をご覧いただきながら、脱国するまでの間に、襄がどのような考えを持っていたのか、そして函館で何を感じていたのか、脱国の理由は何だったのか、などを考えていきたいと思います。

## 江戸城のすぐ横に住み、多くの最新情報に接していたのか

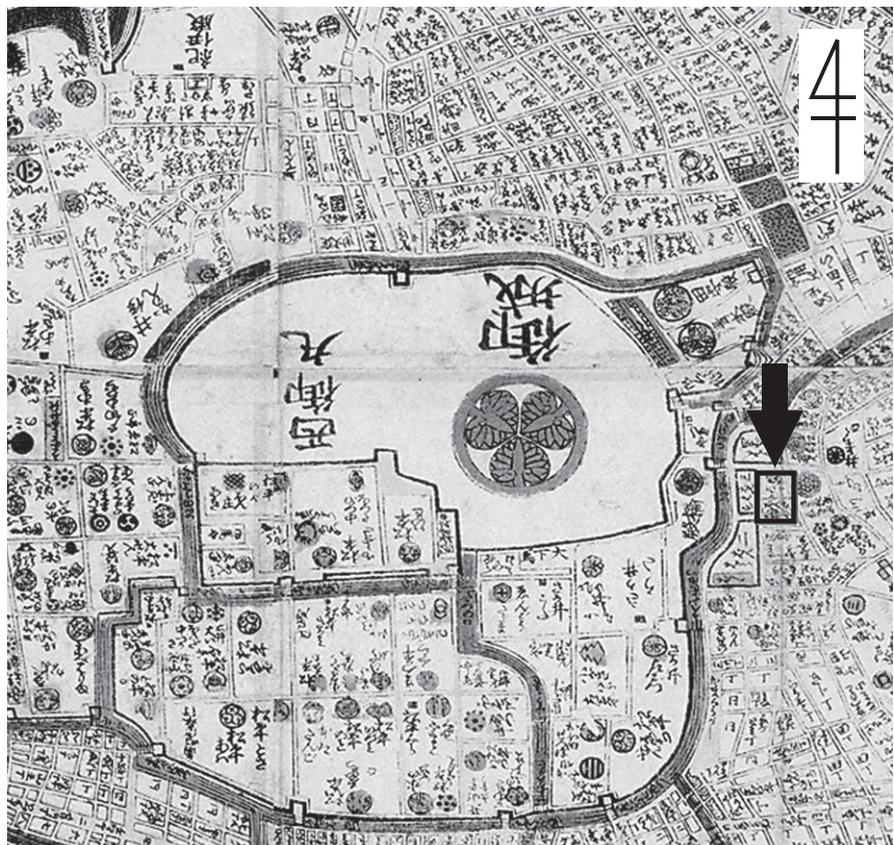
まずは、襄が、幼名の七五三太であった時代について考えましょう。図1は、

新島襄が10歳頃の江戸の地図です。「御城」とは江戸城で、そのすぐ横が安中藩邸。襄が生まれ、21歳まで暮らした場所です。襄の父、民治は、安中藩で柘筆という仕事をしていました。そのためか、同志社所蔵の安中藩板倉家の文書資料にさまざまな通達が残されています。たとえば第一次長州征伐や、寺田屋事件など、遠い地で起きた出来事に関する通達が、父、民治の字で書かれています。新島家では、さまざまな情報にいち早く触れることができたと考えられます。

私は、新島襄という人は、国を憂い、何かを為したいと願っていた憂国の志士

## 当時の新島襄と同じ視点でその体験を考える

世の中には新島襄の伝記がたくさんありますが、脱国については、どれも違つ



【図1】「万世御江戸地図」(部分) 1854年 同志社史資料センター所蔵 矢印□は江戸の安中藩邸

た理由で描かれています。「キリスト教を学びにアメリカへ行つた」というものや、「脱国をするために函館へ行つた」というものもありました。伝記を書く人は後の歴史をご存知ですし、資料も、脱国が成功した後の襄が書き残したものをもとに書いておられる場合が多いと思います。このような話をいたしますのは、私は皆さんに、21歳までの彼と同じ視点つまり、函館から脱国をし、成功するということを知らない状態で、彼の体験がその後になんかどうつながっていくかを考えてみていただきたいと思うからです。

## 初めての航海の途中 楠木正成の墓に参る

江戸に住んでいた新島が本格的に外の世界を見るきっかけになったのが、航海です。快風丸という船に2回乗っています。1回目19歳、1862年1月12日から2カ月間の航海です。今の岡山県の高梁市にあった備前中山藩が中古の帆船を買い、試運転のような形で、江戸から玉島まで往復の航海をしました。襄はこ



れに乗るわけですが、その中で兵庫と玉島を往復した部分だけ「玉島兵庫往復紀行」という手記が残っています。

新島襄が残した日記などを色々見ておきますと、印象深いことがあった時は大変詳細に記述するという傾向があることがわかります。この「紀行」で彼は兵庫の港に下りて、大湊神社に行ったことを非常に詳しく書いています。その部分を抜き出してみました。

〔前略〕茶店の老夫婦答えけり。其より二十間（約36・4m、筆者注）計の坂を下り、二町（約218・2m）程の民家を経ば左手に当一箇「の」石碑に左楠公の墓と記してありし故、左に曲り数歩行けば一筋の道あり、双方は皆平田にして、北に向二町も行けば松樹青々として、内に楠廷尉（楠木正成）の廟あり。此二於て手洗ひ口そ、ぎ廟前に拝すれば、何と無く古を思い起し、嗚呼忠臣楠子之墓と記したるを読みて一拝し、又読

みて一拝、墓後に廻り朱子の文を読めば益感し涙流さぬ計なり。〔新島襄全集〕第5巻5頁〕

船を下りて茶店で道をたずね、身を清めて楠木正成の墓を拝み、涙を流したことが大変詳しく書いてあります。楠木正成は、幕末期、国家に尽くした忠臣のシンボルのように捉えられていました。その墓前で感極まって涙するということは、襄自身も、この時、国のためになにかしたいという気持ちを持っていたということの表れではないかと私は思います。図2は、この墓の拓本を額装し、襄の自宅に掲げられていたものです。今もありません。墓参の詳細な記録を残し、しかもその拓本を大切に持っているのは、襄の楠木正成への強いシンパシーが表れているのではないかと思います。

襄は、江戸から乗り込んだ快風丸で志をとげなければ死んでしまうのも同じだ」という主旨の漢詩を詠んでいました。「志」の内容はわかりませんが、その直後、楠木正成の墓前でこのような態度をとったという事実は、大切に考える価値があるのではないかと思います。

### 函館行きの理由とは何か

1年ほど経ち、襄は再び快風丸に乗り、函館に行く機会を得ました。前回の航海で乗り合わせた友人から「快風丸がもうすぐ樺太へ行くかも知れない」と聞いたのです。快風丸に乗るためには、まず新島家の許可がいる、当然、安中藩の許可もある、また備中松山藩の船ですから、

その許可もいるということで、合計三つの許可が必要なのですが、この時、彼は三日間ほど全ての許諾を受けています。このことから、かなり調整能力の高い人物だったということがかえります。襄はどのような理由を述べて周囲を説得したのでしょうか。父、民治筆の「倅稽古修行一件」という和綴りの冊子があります。民治は子供たちに関する提出書

嗚呼忠臣楠子之墓

忠孝者予天下日月幾乎天地無日月則晦冥否塞人心也孝則亂政相奪就坤又覆余聞楠公諱正成者忠勇節烈國士無雙其行事不可概見大抵公之用兵審強弱之勢於幾先決成敗之機於呼吸知人善任體士推賢是以詳無不中而戰無不克管心天地金石不渝不為利回不為害怙故能與後王室遷於舊都諱云前門拒狼後門進虎廟諱不滅元光探獲機殺國儲偉移鐘厥功垂成而業主棄難善而弗庸自古未有元帥始於庸臣專斷而大將能立功於外者卒之以身許國之風靡倫觀其臨終訓子從容就義託孤寄全言不及私自非精忠實日能如是豈而暇乎父子兄弟世篤忠貞所孝卒於一門盛矣哉至今王公大人以及軍巷之士交口而誦說之不棄其必有大過人者惜乎執筆者無所考信不能發揚其盛美大德耳

右故河攝景三州守贈正三位近衛中將楠公賢明德士舜水朱一拾字  
魯瑛之所撰勅代碑文以垂不朽

【図2】楠木正成墓碑拓本 同志社社史資料センター所蔵

### 「蓬桑の志」

#### 「函館行き直前の心情を詠む」

次に、襄が函館行き直前の心情を書いた漢詩をご紹介します。

一襲幣袍三尺劍 回頭世事思悠々  
男兒自有蓬桑志 不涉五洲都不休  
ちようど快風丸が函館に行く直前に書いた漢詩だと考えられます。一行目は「ち

類は幾分書き残していたようです。その中に、函館行きを藩に願出た時の書類の写しがあり、理由が書かれている部分があります。内容は「かねて願ひ出たっており快風丸に乗りたい。函館に行き、武田斐三郎の塾に入りたい。函館は開港地で、西洋人がたくさんいるので、入塾すれば西洋人から学ぶことができる」といったものです。これが公式の目的と考えられます。

つまり、函館に行く公式の理由は、西洋人と接触すること、外国のことを学ぶということでした。江戸から離れ、外国人から教えるを受けるために行く場所、それが函館であったと考えられるのです。



か。こうした小さな穴を放っておけば、決壊して日本を流してしまう」と。  
 裏は、ロシアと日本の病院のあり方から早くも将来起こるであろうその問題点

よつとした荷物と長い刀、世の中のことを思えば、いろいろと思うところがある」二行目の「蓬桑」というのは、一般的には「桑蓬」といい、四方に名前を知らしめたいという言葉です。1回目の航海では「志」という言葉でしたが、2回目は少し具体的になっていきます。五州とは何を指すのか、世界の五大大陸を指すのか、なかなか解釈は難しいのですが、ひとつの場所にとどまるのではなく、そこからさらに外の世界を見るということかと考えています。

外国人と出会い、異文化を知る

裏が函館に着いたのが1864年4月21日、脱国が6月14日です。2ヵ月弱滞在したことになります。函館での出来事については日記があります。武田塾へ入塾しようとしたものの、武田斐三郎は江戸へ向かい塾を離れており、学生も少なく、ここにも仕方がないということになったため、塾頭の菅沼誠一郎に外国人宅に住み込みで働きたいと依頼して、5月の初め、ロシア人宣教師ニコラ

イ宅に入ったということです。裏にとつてニコライが外国人との本格的な交流のはじまりと考えられます。

私が函館時代の裏の手記で注目した場面が二つあります。まずは図3をご覧ください。中央の絵は、ロシアの病院の間取りです。ロシアの病院が、患者に栄養のあるものを食べさせて手厚く看病し、しかもそれが無料であることなどが細かく記録されています。

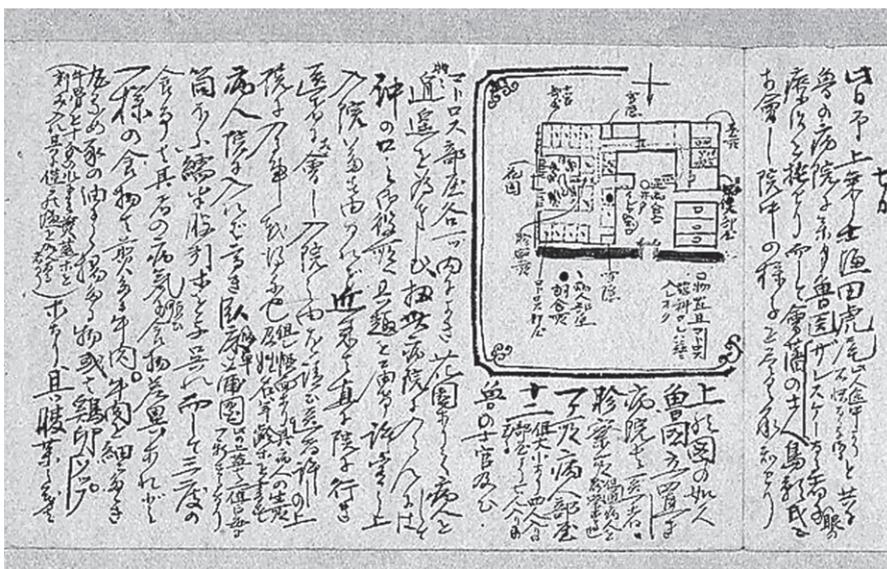
裏の考えも書いてあります。「ロシアは武力で攻め込むことなく、医療を通じて函館の人の気持ちをつかもうとしている。後年、江戸に対する危険分子となる政策の表れではない

を見出ししていたのではないかと、私は考えてしまいます。皆さんはどう思われたでしょうか。

またその2ヵ月後、函館のポルトガル領事館の長が亡くなったという出来事がありました。裏は翌日、「他国の船は弔意を示して半旗にしているのに、日本はしていない。同盟国の礼を知らないということ。同盟国の礼を知らないと書いています。新島を攘夷思想の持ち主とする考え方もありますが、このように「同盟国」という表現をしていることをどう考えたら良いでしょうか。外国を排除するという考えで函館に行ったが、さまざまな経験をする中で考えを改めさせられたのではないかと、同盟、仲間としての考え方も持つようになったのではないかと、などいろいろ考えさせる発言ではないかと思えます。

印象的な思い出の地、函館

ポルトガル領事館の件から2週間後、裏は脱国します。外国人と接し、外国の習慣や医療について知ることのできた2



【図3】函館紀行（部分）同志社社史資料センター所蔵

ヵ月間。彼にとつて函館の日々はとても印象的、刺激的であったのではないかと考えます。函館に来ると急に記録が増えることが、それを物語っているのではないのでしょうか。

函館は脱国の地であるだけでなく、さまざまな体験を通してさまざまなことを考えた地でもあると思います。当時の裏と同じ、その後の歴史を知らない人の視点でさまざまな資料をご覧いただければ、私も気づかないような、新たな発見をしていただくことができるかもしれません。同志社社史資料センター所蔵の資料はインターネットでご覧いただけますので、ぜひ検索していただけたらと思います。

裏は、1887年7月の3日から4日間、妻の八重と函館に滞在し、往事を懐かしんだと手紙に書いています。彼にとつて函館は、八重さんとの思い出の地でもあったんですね。本日6月14日は八重さんの命日ということで、最後にこの話をご紹介します。

(2014年6月14日、FMいるかホール「ペルラ」での講演を編集し掲載)